

『わたしだ。恐れることはない』(ヨハネの福音書 6 章 14-21 節) 2020.9.20.
<はじめに> 「神は確かにおられる」と感じたことはありませんか。逆に「神がおられるのに、どうしてこんなことになるのか」と思ったことはありませんか。また、神に振り回されていると感じることはありませんか。神を信じるというとき、私たちはどんな神だから信じるのでしょうか。

I イエスを王にしよう

① 満ち足りた人々(14)

「イエスのなさったしるし」は、前段に記されたパン 5 つ・魚 2 匹で群衆の空腹を満たされた奇跡です。これは群衆が主に求めたからではなく、イエス主導でなされた御業です。それ故に御業に浴した人々がイエスに歓喜し、熱烈な歓迎と称賛を向けました。

② この方こそ預言者(14-15)

ユダヤ人は、神が遣わされる救い主の約束(申命記 18:15、マラキ 4:5-6)を待望していたからです。この群衆の目には、イエスこそその方だ、と映り、イエスへの期待を告白し、自分たちの王にしようと群がります。

③ 信じるきっかけ

私たちが神と出会い、信じるようになったのは、何があったからでしょうか。大方、祈り願いが聞かれ、神が私に良くして下さることがきっかけでしょう。これは信仰の始まりとしてはすばらしいことですが、いつまでもそこに留まっていたはなりません。

II イエスが分からない

① 奇跡の後で(15-17)

イエスは群衆から離れて、一人山に退かれます。祈るためです(マタ 14:23)。弟子たちは舟で対岸カペナウムを目指します。主に強いられたからです(マルコ 6:45)。大いなる御業を拝し、熱狂・興奮する彼らに対して、主はどうしてこのように振舞われたのでしょうか。

② 荒れる湖の上で(18-19)

湖に乗り出した弟子たちは、強風に進みあぐねていました。彼らの心中も穏やかではありません。「どうして主は私たちを…」と苛立っていたでしょう。夜を迎え、岸から 4.5~5.5km 辺りで、彼らは湖上を歩いて近づいて来られるイエスの姿を発見し、恐れ怯えました。

③ 戸惑いと恐れの中で

主がなさることと意図に納得できる時に信じることは難しくありません。しかし、理解できず、意見を異にする時には、私たちは主を疑い、反発しないでしょうか。予想外の主の動き・働きを目にする時、戸惑い恐れることはないでしょうか。信仰はどこにあるのでしょうか。

III イエスを迎える

① 「わたしだ。恐れることはない。」

湖上に主の声が響き、彼らは主であると気づきます。私たちが主を見失い、戸惑うとき、これまでの歩みで培った主との交わりと理解を、主は呼び覚まされます。主イエスは私にとってどんな方でしょうか。嵐の中、湖の上にも主がおられると受け取れるでしょうか。

② 喜んで舟に迎える

弟子たちは主を舟に迎え入れました。「喜んで」は感情とともに意志です。理解し、納得でき、願わしい主とその御業を受け入れるところから、不可解と不思議を帯びた主を信頼し、この方の愛と最善に自らを委ねる決意です。

③ 主との関係

群衆は主を預言者と認めつつも、自分たちの理想と願いへと主を引き連れようとします。しかし主はそれに自らを任せられません(ヨハネ 2:23-25)。主は神の御心に従おうと、祈りに向かわれます。そして、主の弟子にも同じ信仰と姿勢を求められます。

<おわりに> 思い通りにならないとき、物事が我が意とは別の方向に向かうとき、私たちの心は乱れます。その時にも主は近づいてくださり、「わたしだ。恐れることはない。」と力強く語られます。私たちは主がどういう方だから、信じているのか、改めて探られます。(H.M.)